

『人間の経済』

2017年06月12日

宇沢弘文氏の講演やインタビューなどを集めた『人間の経済』は読んでいて、実に楽しかった。宇沢氏は世界的に著名な経済学者であるが、彼の学説が世界経済にどのような影響を与えているのかは知らない。宇沢氏の「社会的共通資本」説は、ゆたかな経済生活を営み、すぐれた文化を展開し、人間的に魅力ある社会を安定的に維持することを可能にする社会的装置で、それは、お金のからくりだけでなく、農業、都市、医療、教育などの具体的テーマに関係した幅広い視点を持つ経済学であると聞く。

本の「序 社会的共通資本と人間の心」の冒頭で下記のように書いている。「人間は心があってはじめて存在するし、心があるからこそ社会が動いていきます。ところが経済学においては、人間の心というものは考えてはいけない、とされてきました。マルクス経済学にしても人間は労働者と資本家という具合に階級的にとらえるだけで、一人ひとりに心がある、と考えません。また新古典派経済学においても、人間は計算だけをずる存在であって、同じように心を持たないものとしてとらえている。」

心を経済学に入れた視点から興味深い二例を語っている。一つは、宇沢氏が文化功労者に選ばれ、皇居に行った時のことである。天皇制に批判的な考えを持っていたので、違和感を覚えていたが、親しみのある昭和天皇に新古典派の理論や社会的共通資本とは何かについて支離滅裂にしゃべっていた。天皇は話を遮り、「君！君は経済、経済というが、つまり人間の心が大事だと、そういいたいのだね」と言われた。この言葉が、経済学の研究を進める動機になった。二つは、ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世にヴァチカンに呼ばれ、「回勅」の作成を手伝った時のことである。1891年、教皇レオ十三世によって出された「レールム・ノヴァルム（革命）」は経済学の考え方に大きな影響を与えた。そこには「資本主義の弊害と社会主義の幻想」という副題がついていた。レオ十三世の回勅から百年目、ヨハネ・パウロ二世からアドバイスを求められ、躊躇することなく「社会主義の弊害と資本主義の幻想」こそが、新しい「レールム・ノヴァルム」の主題にふさわしいと返事をした。社会主義の弊害は、スターリンの恐怖政治と東欧諸国への過酷な支配であり、資本主義の幻想は、市場原理を中心とした運動がやがて人々に大きなダメージを与えるという危惧である。ヨハネ・パウロ二世の新しい「レールム・ノヴァルム」は心を見つめた人間肯定を促すものとして、ヨーロッパの形成に大きな役割を果たした。また、教皇は後樂園での野外ミサで、流暢な日本語で、「平和は人類にとって、いちばん大事な共通の財産である。特に日本の平和憲法は、平和を守る非常に重要な役割を果たす社会的資産である」と語った。宇沢氏は、「医療や教育、自然環境が大事な共通資本であることはもちろんですが、もう一つ、つけ加えるなら、平和こそが大事な社会的共通資本なのです」と書いている。平和は経済によって作られるのである。

戦後、焼け野原と化して、めぼしい建物は米軍に接收された。宇沢氏が通っていた旧制一高に占領軍の将校が来た時、安倍能成先生は英語で「この一高はリベラルアーツのカレッジです。ここは聖なる場所であり、占領という世俗的な目的のためには使わせないときっぱり断った。将校たちは黙って帰って行った。宇沢氏は、「社会的共通資本としての教育」が芽生えた原点になったと言う。当然ながら、フリードマンの儲けさえすればよいとする市場原理主義に激しく反対している。お金や物に恵まれるだけでなく、心の中で、生きていることを喜び合う人間の経済を語るのを清々しく聞いた。